

## 論文の内容の要旨

論文題目                    五感と身体部位に基づく比喩  
                                  —フランス語の感情と認識の表現—

氏名                         治山純子

本稿では、認知言語学の理論に基づいて、フランス語のメタファー・メトニミーなどの比喩を研究した。「認識」と「感情」という2つの精神世界と我々の身体との関係を、言語表現の分析を通して様々な観点から論考した。本稿では、「認識」を、「知る」「理解する」等の知的行為を代表とする、基本的に客観的な精神活動とし、「感情」を、比較的一時的である「怒り」「驚き」等の強い感情や、比較的持続的な「楽しさ」「不快」等の気分などを含む、基本的に主観的な精神活動とする。そして、認識・感情のような抽象度の高い概念を表すのによく用いられ、人間の認知の根幹を成すと考えられているメタファーについて理論的考察を行った。

第1章では、古代から現代に至るまでのメタファー観・メタファー研究を概観した。古くはアリストテレスまで遡って、その理論を紹介し、そして、Richards, Black など認知言語学のメタファー観の先駆けとなる哲学の理論について述べた。次に、1980年に Lakoff と Johnson により出版された *Metaphors We Live By* 以来の認知言語学のメタファー観について概観し、特に、経験基盤主義に立脚する認知言語学において重要な概念である身体性に関して詳述した。

第2章では、身体は、我々が物事や外界を把握する際の基準となっていることを、フランス語の例と共に示した。また、身体部位名詞が物体部分を表す場合のメタファー・メト

ニミ一的基盤について考察した。

第3章では、身体を通して外界の事物を認識する「五感」を基盤に、各感覚と我々の「認識」や「感情」といった精神世界がどう関わっているのかを、フランス語の言語表現の分析を通して明らかにした。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の順に、各感覚の「動詞」、「形容詞」、「受容器官の身体部位名詞」等の例を豊富に提示し、体系的に分析した。身体部位名詞に関しては、視覚は *œil (yeux)* を、聴覚は *oreille(s)* を、嗅覚は *nez* を、味覚は *langue* と *lèvres* を、触覚は *peau, main(s), poing(s), jambe(s), pied(s)* を分析した。

そして、各感覚表現を用いた認識・感情の表現の傾向を各感覚の特性から論じた。視覚表現には、認識を表すものが多く見られる。これは、視覚が、感覚対象との直接的接触がなく、客観的な側面の大きな感覚であり、知的な認識と広く結びつくためだと考えられる。同時に、視覚表現は、感情を表すものも豊富である。これには、対象をどの角度から見るのかといった観点を考慮に入れると、視覚が主観的にもなり得ることが関係していよう。視覚は認識との結びつきの強さが強調されることが多いが、本稿では、視覚による感情表現が多いことを示し、視覚と感情との関連は非常に密接であると主張した。

聴覚表現には、認識に関するものが多く見られる。これには、聴覚は、感覚対象との直接的接触がなく、識別能力が高く、客観的側面の大きな感覚であることが関係していよう。聴覚の感情表現に関しては、ネガティブなものが多いことを示した。

嗅覚表現には、認識を表すものが見られるが、曖昧な判断を表すものに限られる。嗅覚は、感覚対象との直接的接触を持たないが、鼻で嗅ぐだけでにおいの出所となっているものを同定できるわけではないので、知的領域と結びつきはするが明示的ではない判断を表すのに用いられると考えられる。また、嫌な臭いとの関連から嫌悪感と結び付いた表現が多いことを示し、生理学的な要因の関与を指摘した。

味覚表現には、ポジティブなものからネガティブなものまで種々の感情を鮮明に表したものが見られる。味覚は、感覚対象との直接的接触を必要とし、個人差が大きい感覚であり、また、同じ人物でも時間の経過や状況等によって味の好みに差が生じ得る、非常に主観的な感覚である。このことは、現代フランス語においては、味覚により認識を表す定型表現は見られず、味覚表現が専ら感情の表現と結びついていることの一因であると考えられる。

触覚表現には、多種多様な感情を表すものが見られる。これは、触覚が、感覚対象との直接的接触を必要とし、個人差のある主観的な感覚であり、快／不快の感触と共にイメージ喚起力が高いことが理由であろう。触覚表現は、また、認識を表すのにも用いられる。その場合、「理解することは手に掴むことである」という概念メタファーに基づいたものが中心である。

このように、各感覚の特性から、五感と認識・感情の関係に光を当て、その傾向の理由を考察した。そして、五感を用いた認識・感情の表現には各感覚の特性が反映されていると主張した。

上述の通り、詳細においては差異が見られるが、全体的な傾向としては、「視覚・聴覚」が「認識」と結び付きやすく、「味覚・触覚」が「感情」と結び付きやすい。「嗅覚」は中間に位置する。ただ、「視覚」に関しては、「認識」のみならず「感情」とも結び付きやすい。このような傾向について、「主観的／客観的」「感覚対象との直接的接触の有無」「識別能力」「評価極性」「感覚動詞の意志性」といった観点から論考した。

また、感情との結び付きの強さに差異があるにせよ、五感の全ての受容器官が感情を表すことができることを強く主張した。そして、五感の感情表現の共通点を挙げた。

また、人間の理解において根源的役割を果たしているメタファーに関する理論的考察を行った。メタファーの写像関係の特徴を考察し、一つ概念（ターゲット領域）を表現するのに複数のソース領域がある場合、各ソース領域の特徴がターゲット領域に反映され、意味に、時には微細ながら違いが見られることを指摘した。

第4章では、五感の受容器官の身体部位を用いながらも、その感覚に基づいていないメタファー・メトニミー表現について考察した。五感に基づかない場合、様々な動作や行為、身体部位の重要性等により認識・感情が表されることを示し、また、認識の表現より感情の表現の方が多く見られることを指摘した。また、五感には基づかない、身体部位による表現の分析から逆に、五感と認識・感情のメタファー・メトニミー表現の関係を考察した。さらに、「心」「頭」などを用いた熟語も分析した。そして、五感が関わらない場合も含め、人間の身体全体が認識・感情など精神のメタファー・メトニミー表現の基盤を成していることを明らかにした。

また、メタファーに関する理論的考察として、一つのソース領域が複数のターゲット領域を表すメタファー表現も考察した。そして、ターゲット領域により写像要素に差異が見られることを主張した。

第5章では、「感情」と「身体」の関わりについて、まず、感情表現の類型論的観点から考察した。様々な文化圏において、多様な方法で表象されてきた「怒り」を主な分析対象とし、怒りのメタファー・メトニミー表現に見られる、普遍的側面と、文化・言語に特徴的な側面について考察した。まず、起源を異にする言語に共通して見られる、普遍性の高い、怒りの概念化について確認した。また、西洋における共通の文化・風習に基づく怒りの表現の例を挙げた。さらに、フランス語に特徴的と思われる怒りの表現を分析した。フランス語には、多種多様な怒りのメタファー表現が見られ、特徴的な概念メタファーに基づいたものも多い。このような怒りの表現が見られることの文化的・社会的要因について考察した。次に、絵画における怒りの表象を分析した。ヨーロッパのフランス語圏のBD（漫画）に描かれた怒りを分析し、言語表現と絵画表現に共通性が見られることを示した。このような感情表現の類型論的観点、絵画的観点からの分析を通し、従来の研究では明確にされていなかったフランス語の怒りのメタファーの特徴を言語・絵画双方の観点から明らかにすることで、感情のメタファーの認知言語学的研究を実証的に補完した。

第6章では、定型表現以外にもメタファーが多用されていることを、様々な分野において

示した。まず、なぞなぞなど言葉遊びにおいても我々の身体部位を用いた表現が見られることを示した。さらに、メタファーとなぞなぞには、逸脱によるアドホック・カテゴリーの創設、適度な逸脱と面白さの関係、新たなる知の構築、教育への応用可能性といった共通点があることを指摘した。

また、巧みに人々の注意を引き、魅了することが求められる広告においても、身体に基づいたメタファーが用いられた例を挙げた。そして、メタファーの想像的かつ創造的側面は、芸術的・美的喜びを与え、表現を豊かにしたり解釈の幅を広げたりすることを主張した。

また、我々は、未知のものをしばしば既知のものとの類推によりメタファー的に理解しようとすることをコンピューター関連の語彙の例と共に示した。そして、メタファーは、新しい概念の理解を促進する力を有することを確認した。

さらに、思考力一般の育成に関して主張されてきたメタファーの教育への応用可能性についてフランス語教育の観点から論考した。熟語をメタファー・メトニミーなどの動機付けと共に覚えることで、記憶への定着が高まること、意味の予測に関しても有用であることを主張した。

本稿では、上述のように、身体性基盤を持つ、認識や感情という精神世界を、フランス語のメタファー・メトニミー表現の分析を通して論究した。そして、特に、五感に基づく場合も基づかない場合も広く身体全体に基盤を持つ感情の表現に関しては、他言語との比較、絵画表現との比較の観点からも広範な考察を行った。また、言語学的・哲学的・心理学的に様々な問題を内包しているメタファーについて、写像の特徴、面白さが感じられる要因、クリエイティビティ、新たなる概念の理解、教育への応用といった観点から論考し、メタファーの本質と価値に光を当てた。

本研究を通して、我々の身体と精神の密接なつながりを、フランス語の比喩表現の分析を通して実証した。そして、言葉の創造性、それによる人間の新たなる知の構築のメカニズムについて、一貫性のある理論で説明を試み、その有用性を主張した。